

太平洋さけ資源回復緊急対策事業(水産庁委託)の取り組み

奈良 和俊 (企画課長)

背景

我が国のサケ来遊数は、1970年代の前半までは1,000万尾を下回っていましたが、その後増加し始め、1996年には史上最高の8,879万尾を記録しました。しかしながら、順調に増加してきた来遊数は、1997年以降4年連続で減少し、2000年には4,400万尾となりました。来遊数の減少は、特に岩手県を中心とする本州太平洋側において大きく、過去最高時の1/3まで落ち込んで漁業者のみならず加工業者にも影響が及びました。

サケ稚魚の放流数は、この20年間20億尾前後でほぼ一定であるため、来遊数の減少は回帰率の低下によるものですが、低下した原因は分かっていません。このため、2001年度に水産庁において、不漁原因の解明及び近年の海洋環境に適合した放流方法の検討等、資源回復の方策を見出すために本事業が生まれ、当センターに委託されました。

取り組み状況

本州太平洋側における海洋生活初期のサケ幼稚魚の成長、分布、生残等を明らかにするため、2001年11月に岩手県の唐丹町漁業協同組合の協力により、片岸川ふ化場に収容されたサケ卵の一部に耳石温度標識を施し(図1, 2)、2002年3月に片岸川へ372万尾の標識魚が放流されました。

その後、標識魚が滞留する沿岸域(唐丹湾)(図3)、通過が想定される津軽海峡東部の太平洋沖合域、えりも岬において、岩手県水産技術センター、北海道大学水産学部、えりも町漁業協同組合の協力を得て、サケ幼稚魚の採集と餌生物量など海洋調査を実施しています(図4)。

また、近年のサケ来遊数が著しく減少している地域と比較的安定している地域に回帰したサケ親魚の鱗相解析から、地域間の成長過程の差異等も調査しています。

さらに、2002年秋には、岩手県の片岸川ふ化場に加え、宮城県の北上川漁業協同組合の協力を得て大嶺ふ化場(北上川)に収容されるサケ卵の一部にも耳石温度標識を施すことを計画しており、本事業の充実を図ります(図4)。



図1. 片岸川ふ化場に設置した耳石温度標識装置

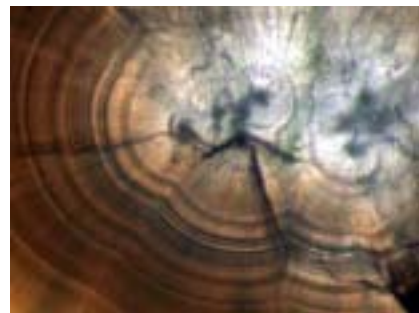


図2. 片岸川ふ化場産サケ稚魚の耳石標識パターン (RBr=1:1.2,2,2,4)



図3. 唐丹湾におけるサケ幼稚魚の採集風景



図4. 耳石温度標識を施すふ化場と調査海域